



高齢者宅の雪かきに汗を流す  
室蘭言泉学園の職員＝昨年12月、室蘭市新富町

## 室蘭「雪かきレンジャー」丸10年

# 笑顔と絆温かく

高齢で除雪が難しくなったお年寄りに代わり、市民の有志が担い手となる室蘭市社会福祉協議会の登録制ボランティア制度「雪かきレンジャー」が開始から丸10年を迎えた。人口減と高齢化に伴い、地域社会で機能していた相互扶助の仕組みが弱まっているといわれる中、関係者は「雪かきに困る高齢者の存在を知ってもらい、地域で助け合う第一歩になる」と汗を流している。（野村英史）

### ■助かっています

丘陵に囲まれた沢治いに住宅が張り付く母恋地区。人口約5千人のうち65歳以上は約2200人で高齢化率は45%。まとまった雪が降った昨年12月28日の朝、今季登録した社会福祉法人室蘭言泉学園の職員6人が2グループに分かれ、高齢者宅2軒の玄関先や道路までの雪をかき出した。

妻と2人暮らしする新富町の菅井満男さん(89)は「昨年までは自力でやっていたけど寄る年波には勝てず、もう無理と諦めていた。本当に助かっています」とほほ笑んだ。玄関前が北風で吹きだまるのが悩みだった。市の広報誌でレンジャーの存在を知り、初めて申し込んだ。

### ■やりがいを実感

市社協が地域福祉実践計画の策定に向け実施したアンケートで、高齢者の困り事として浮かび上がったのが「雪かき」だった。制度は2011年(平成23年)1月、東明地区の一部で、室蘭工大の学生の協力を得て試行。その後、市内全域に広がった。担い手の中心は高校生や大学生、事業所に勤務する社会人だ。

謝礼は1回500円。雪かきは原則、玄関から道路までなど一定のルールを設けている。「ワゴンコインの有償とすることで、利用する側は頼みやすく、支援する側もやりがいを実感できます」。自らもレンジャーとして活躍する市社協の川島真央主事はこう話す。

今季、支援を必要としているのは1月5日現在242件。これに対し、レンジャーの登録者は470人。充足しているように見えるが、地域によってマッチングがうまくいかず、高砂町など蘭東、蘭北地区で待機が発生。担い手不足の懸念は常に付きまとう。

人手不足の現状を知った企業や高校からまとまった人数の登録が続く。室蘭言泉学園は昨秋、専門のボランティアチームを立ち上げ、職員約60人が登録。法人内の事業所の垣根を越えてグループを編成し今季、母恋地区の5件を担当している。

### ■住民との交流も

「法人の性格上、奉仕を受けるばかりだったので新鮮です」と話すのは法人本部の綱嶋夕子課長と高橋美帆さん。2人ともレンジャーの一員として初出勤を済ませ「爽快感、達成感があり『ありがとう』の一言で心が温かくなる」と実感を込めた。住民をはじめ、職員間で新たな交流が生まれている。

地域が変わる原動力はポジティブな感情から生まれる。プラスの感情を積み上げるプロセスが地域づくりだと、雪かきに携わる誰もが実感している。

雪かきレンジャーの問い合わせは市社協、電話0143・83局5031番へ。